

□■地元文化守る能楽堂

中国地方で唯一の本格的な能楽堂として71年に建てられた喜多流大島能楽堂。1世紀の間、伝統芸能を守り続けてきた大島家が能楽普及の拠点とした舞台はかつて、霞町1丁目(当時の



喜多流大島能楽堂

西町新馬場東)にある現在の広島銀行福山営業本部の場所にあった。

霞町の舞台は2代目の大島寿太郎が1913(大正2)年、福山駅から通う門人の利便性を考え、私費を投入して建てた。寿太郎は、能楽の専門になってほしいとの家元の懇願を受け、その2年前に樹徳尋常小学校の校長職をなげうったばかりだった。当時の日記を見ると、寿太郎の父で初代の七太郎が「大いに安堵満悦」する一方で、門人が能舞台の規模について「ぜいたくならずや」と、出費の多寡をあれこれ心配していたことが分かる。

寿太郎が情熱を注いだ能楽堂

は45年の福山空襲で焼失。父の遺志を継いだ3代目久見が家元のいる東京から帰郷し、現在の光南町2丁目に能舞台を再建した。58年には能の魅力を広く市民に理解してもらおうと、解説付きの定例鑑賞能を開始。小学校の体験授業で舞や謡を教えるなど、能楽の普及に努めている。02年には、地元「鞆の浦」を題材にした新作能を発表した。

4代目政允(まさのぶ)さんの長男で、5代目の輝久さん(30)は「先人が築き、育んだ舞台を通して、ふる里の伝統文化を見つめ直すこともできる。地域の皆さんと一緒に次世代へ引き継いでいきたい」。